

人、歌讀^{まじ}人とは見へず大根引 東京ゆかり子

追加

鹽野奇零

益良雄も太刀解きて屠蘇の膳
敵味方先づ打ちとけて御慶かな
凱旋に國威の高し初日影

漁夫

雨峯生

ゆうひ 夕日くまなく彩りし
 がげなが 影流しゆく鳥川
 なかかげ 長き影をば地に描き
 いへち 家路に向ふ思ひこそ
 はそ 細き煙は釣り糸の
 うきよ 浮世の波はしづかにて
 たは 例は峰の白雲の
 てきと 洞口にかへるそれなるか
 かしお 芥子生えゆきて限りなき
 むらさき 毛武の峰の濃紫
 きし 岸をたどれる漁夫一人
 うた 俚歌にわか身をまかせつ、
 げに「詩の使」歌の神
 それにも似たる生活も
 今日もくれたる樂さを
 無心ながらに湧きたちて
 無心といへどひたすらに
 このみ 眞實を結ぶ道理を

無邊天地の擴かりん
通ふ運命と思出て

柴の破垣、妻もなき
我家わびしき獨住居

た「自然」のふところに
願ふ幸こそ天地の

深き惠なごほかん
今日はくれぬくれはてぬ

四邊はやゝに冷雲の
響ひきたりて川水は

しづかに岸邊さすりゆき
音も淋しくなりぬれど

礙りなき身はすがくと
あがきもはやくなりゆきて

観喜の光眉にみゆ
話ふ小うたの音もやみて

雪の夕べ

胡山山人

浮世の塵をしばしだに

清めんものと久方の

天つ御空を立ち出で、
雪は下界にくだり來ぬ。

清き心を白妙の

色に見せつ、野邊山へ

塵のちまたもいとひなく